

『ゴージャスお宝鑑定家』

「うーん、ゴージャス！」16』

ジャンル：ハイテンションコメディ

上演時間：約60分

シーン：剛田質店の朝（10分）

舞台設定

- ・ 舞台は剛田質店。金色のカーテン、クリスタルのシャンデリア、そしてキラキラ光る棚が目立つ。豪華さが過剰すぎて逆に笑える内装。

登場人物

- ・ 剛田：自分のゴージャス感に絶対的な自信を持つ店主。どの台詞も大げさかつエレガントすぎる。

・ 白金…剛田の見習い。剛田の過剰な振る舞いに終始ツツコむ常識人。

（幕が上がる。剛田が金のガウンを翻しながら、宝石のように輝くティーカップを手に座っている。白金は棚を磨きながらため息をついている。）

白金

（テンション低めに）

剛田さん、もうこれ以上棚を磨いたら、天井からの光でお客さんが目、つぶれますよ？

剛田

（ゆったり振り向き、片手を空に掲げて）
素晴らしいではないか！ 目が眩むほどの輝きこそ、真のゴージャスだッ！！

白金

（磨く手を止めて苦笑い）

いや、普通は目が眩んだら営業妨害なんですけど……。

剛田

（大きさに紅茶をすすり、微笑む）

白金くん、君の考え方はまだ凡庸だね。ゴージャスの真髄は、目に見える輝きだけではない。心に焼きつくこの煌めきだ！

白金

（目を細めて）

いや、眩しすぎて心どころか網膜に焼きついちゃいますけど……。

剛田

（急に椅子から立ち上がり、舞台中央へ）

ふむ、やはり君にはまだゴージャスの奥深さがわからないようだ。良いか、ゴージャスとは

――

白金

（慌てて手を挙げて止める）

ちよつと待った！ その話、昨日も聞きました！ ゴージャスがなんちゃら、優雅がどうたらって！

剛田

（驚きの表情で）

なんと！？ 君は昨日の話が理解できていなかったのか！ それはゴージャスへの冒涇だ！

白金

（頭を抱えながら）

ああ、来たよ……この大袈裟すぎるやつ。

（剛田、劇的なポーズで語り始めるが、そこへ三波が登場。慌てた様子で店内を見回す。）

三波

（おずおずと）

あ、あの……鑑定をお願いしたいんですが……。

剛田

(急に優雅に振り返り、三波を歓迎する)

おやおや！ 初めての方ですね？ ようこそ、

ゴージャスの殿堂へ！

三波

(困惑しつつ)

……えっと、質屋ですよね？

白金

(小声で)

そう思うでしょ？ でも違うんです、ここは剛

田ワールドなんです……。

剛田

(白金を無視して)

どうぞ、こちらへ。お持ちいただいたお宝を拝
見しましょう！

(三波が布に包まれた品を慎重に取り出す。

舞台中央で布を開くと、青く輝くトルコ石の
醤油差しが現れる。)

剛田

(驚愕し、一步下がる)

なんだこれは……！

白金

(驚いて)

やっぱり変なもの来た！

剛田

(手を広げ、舞台の端から端まで歩きなが

ら)

うくん……ゴージャス……！

(急にライトが剛田を追い、オーケストラ風の
SONGが流れる。白金と三波は目を丸くして驚
く。)

白金

(ツッコミ気味に)

いやいやいや！ ゴージャスですか？ ただの醬

油差しですよ……？

剛田

（醤油差しを優雅に持ち上げ、舞台中央で観客に向けて見せつけながら）

ただの醤油差し？ いや、これはただの器ではない！ トルコ石！ 世界が誇る青の奇跡！

三波

（そわそわしながら）

あの、鑑定してもらえますか？ おばあちゃんが大事にしてたものなんです。

剛田

（感動しながら）

素晴らしい……この宝が大切に扱われてきたことが、手に取るように伝わる！

白金

（小声で）

いや、トルコ石が醤油に染まったら台無しですけどね。

シーン2：トルコ石の醤油差し し（約15分）

（舞台中央で剛田がトルコ石の醤油差しをル
ーペで観察しながら、感嘆の声を上げている。
三波は恐縮しつつ見守り、白金は困惑顔で腕
を組んでいる。）

剛田

（大きさに）

なんとという輝き……！ これはただのトルコ石
ではない。選ばれし青の煌めきだ！

白金

（ツツコミながら）

いやいやいや、剛田さん、冷静になってくださ
い。ただの醤油差しですから！ 醤油入れる
やつー！

剛田

（白金を一瞥し、気品漂う声で）

白金くん、君の発言はまるで砂漠に咲く花を
ただの雑草と呼ぶようなものだ。

白金

（困惑しながら）

いや、雑草で合ってますよ！ それ、醤油差し
なんですから！

三波

（控えめに）

あの……これ、本当に鑑定してもらえるんで
しょうか？

剛田

（胸に手を当て、誇らしげに）

もちろん！ 剛田質店に来た以上、どんなお
宝も私がゴージャスの極みに導いてみせま
す！

白金

(小声で)

また始まったよ……。

(剛田、舞台中央でループを使いながら観察を続ける。急に表情が真剣になる。)

剛田

(息を呑みながら)

……これは……ただのトルコ石ではない……！

白金

(食い気味に)

ほら来た、そういうの絶対言うと思った！

剛田

(振り返り、熱を込めて)

このトルコ石には、守護と幸福を象徴する石言葉が宿っている！ その青は、人生の航海を導く海そのもの。

白金

(ため息混じりに)

おおー、それっぽいけど、だからって醤油差しが人生を導くわけじゃないですよね？

剛田

(無視して続ける)

さらにだ！ トルコ石は古来より、旅人のお守りとして愛されてきたのだ！ これを持ってば、きっとどんな料理も最高の一品に導かれるだろう！

三波

(感心しつつ)

そ、そんなにすごい石だったんですね……！！

白金

(呆れた顔で)

いやいや、これで寿司食べてもただの寿司ですよ。

シーン③：実際に醤油を使ってみる（約25分）

（剛田、突然意を決したように拍手をする。
舞台奥からスタッフが寿司と醤油を持って登場。白金は驚いている。）

白金

（目を丸くして）

ちよつ！ なんて寿司用意してあるんですか！？

剛田

（堂々と）

ゴージャスな品物は、実際に使用してその真価がわかるものだ！

白金

（慌てて）

いやいや、醤油差しって使ったら汚れますか
ら！ ゴージャスの概念、崩れますよ！？

剛田

（優雅に醤油を注ぎながら）
ふむ。汚れる？ それは凡庸な発想だ。トルコ
石の青が醤油でより一層引き立つのだよ！

（剛田が寿司に醤油を垂らし、一口食べる。
突然、大げさに目を見開いて口元を抑え
る。）

剛田

（絶叫するように）
う~~~~ん……ゴージャス！！！！

三波

（驚きながら）
ど、ど、どという味なんですか！？

剛田

（天を仰ぎながら）

これぞ至高の味わい……！ トルコ石の力が
醤油を昇華させた……！

白金

（冷めた顔で）

いや、ただの醤油ですよね？ 醤油メーカー泣
いてますよ？

剛田

（白金に寿司を差し出しながら）

さあ、白金くんも味わいたまえ。

白金

（渋々と）

いやー、これ普通の醤油……。……あれ、ちよ
っと待って、これめっちゃ美味い！？

（白金、驚きの表情で寿司を食べる。三波も
試し、全員が驚愕のリアクションを取る。舞台
は笑いと盛り上がりで最高潮に達する。）

シーン4: 金額発表(約15分)

(寿司を堪能した後、剛田がトルコ石の醤油差しを手に取り、神妙な顔つきで舞台中央に立つ。白金と三波は、それぞれ別の椅子に腰掛け、緊張気味に見守る。)

剛田

(醤油差しを高く掲げながら)

さあ、鑑定結果の発表だ！

白金

(慌てて立ち上がる)

ちよっと待った！ 鑑定っていつても、これどう見ても普通の醤油差しですよ！？ 金額なんてつけられるんですか！？

剛田

(余裕の笑みを浮かべながら)

白金くん、君はまだわかっていない。ゴージャスとは、単なる物質的価値では測れないものだ。輝きと歴史、そして感動を加味して初めて、その真価が決まる！

白金

（小声で）

感動って……結局、剛田さんのテンション次第じゃないですか……。

三波

（そわそわしながら）

あの、そんなに高いものじゃないと思うんですけど……。

剛田

（手を振り、優雅に制しながら）

いいえ！このトルコ石の醤油差しには、無限の価値が秘められています！

白金

（腕を組みながら）

どうせ「ゴージャス料」みたいなのが加算されるんでしょ……。

（剛田、急に厳かな表情になり、計算機を取り出す。舞台にはドラマチックなBGMが流れ始める。）

剛田

（計算機を叩きながら独り言）
まずはトルコ石の希少性……次に、この芸術的なフォルム……さらに「食の革命」を巻き起こした実績……。

白金

（驚いて）
いや、革命って！ 寿司が美味かっただけじゃないですか！

剛田

（無視して続ける）
最後に、この「青の輝き」が心に与えた感動の代価を加えて……。

（剛田が最後の計算を叩き、満足そうに頷く。三波は緊張し、白金は呆れ顔。）

剛田

（観客に向けて手を広げながら）

結果、このトルコ石製醤油差しの買取金額は

——！

（舞台にスポットライトが当たり、緊迫した間が数秒流れる。）

剛田

（高らかに）

50万円！！！！

三波

（絶叫）

ご、50万円！？

白金

（椅子から転げ落ちながら）

は！？ どこにそんな価値があるんですか！？

剛田

（真剣な表情で）

白金くん、君はわかっていない。これは単なる醤油差しではない。芸術作品であり、心の癒しであり、食卓の革命なのだ！

三波

（困惑しつつ）

いやでも……そんな高額じゃ申し訳なくて……。

剛田

（微笑みながら）

いいえ、これはこの店のゴージャス基準に基づいた、正当な評価です。

白金

（ぽつりと）基準が剛田さんの頭の中にしかないんだよなあ……。

シーン5: 剛田質店の夕方 (約15分)

(三波がトルコ石の醤油差しの査定額を聞いて驚きつつも、感謝して帰ろうとする。その場には空になった寿司の皿が散らばっている。剛田と白金は満足そうに座っている。)

三波

(恐縮しながら)

あの、本当にありがとうございます！ おばあちゃんの宝物がこんな高く評価されるなんて……！

剛田

(優雅に頷きながら)

感動を分かち合えたこと、それが何よりの喜びです。ゴージャスたるもの、分かち合うべし！

白金

(ぼそりと)

分かち合ったのは醤油差しより寿司の方です
けどね……。

三波

(頭を下げながら)

それでは失礼します！

(三波が店を出ていく。剛田と白金がホツとした表情で椅子に座り直す。)

白金

(疲れた様子で)

いやー、今日もすごい一日でしたね……。トル
コ石の醤油差しなんて、二度と来ないですよ、
あんなの。

剛田

(目を閉じて頷きながら)

そうかもしれない。だが、今日という日は、
間違いなくゴージャスな一ページとなった。

白金

(呆れたように)

どんな日記なんですか、それ。

(そのとき、剛田が急に目を輝かせ、舞台奥に向かって手を挙げる。)

剛田

(大声で)

店員さん、寿司をもっと持ってきたまえ！

白金

(慌てて立ち上がる)

ちよっ！ 剛田さん、もう寿司二〇人前食べた
じゃないですか！？

剛田

(大きさに胸を張り)

だが、白金くん！ このトルコ石の醤油差しが
あれば、寿司の美味しさは無限大なのだ！

白金

(頭を抱えながら)

いや、醤油差し関係なくお腹の限界がありませんから！

(舞台奥からスタッフがまた寿司の皿を持って

登場。剛田はその皿を見て感動の表情を浮かべる。)

剛田

(皿を手に取り)

う~~~~ん、ゴージャス!!!

白金

(ため息混じりに)

もういいですって、そのテンション!!

(剛田が寿司を醤油にたっぷり浸して食べる。

そのたびに大げさなリアクションを取る。白金もつられて寿司を食べ始めるが、驚いた表情

に変わる。)

白金

(驚愕して)

……いや、やっぱりこれ美味すぎませんか！？

剛田

(満足そうに微笑みながら)

これこそ、トルコ石の奇跡だ。

(その後も二人は寿司を食べ続ける。最後には二人ともお腹を押さえて動けなくなる。)

白金

(ぐったりしながら)

もう無理です……これ以上は入らない……。

剛田

(苦しそうにしながらも満足気に)

だが、美味の果てにたどり着いたこの境地、まさに……ゴージャス！

（二人が寿司で満たされたお腹を抱えながら
笑い、舞台の明かりが徐々に暗くなる。最後
にスポットライトが剛田に当たる。）

剛田

（観客に向かって優雅に一礼し）
皆様、次のゴージャスな日まで、どうぞごきげ
んよう！

（幕が下がる。拍手と笑い声が響き渡る。）